

## 七 衆生の情に精通す

「知りたや知られたや」とは、人間衷心の要求である。我等は多くを知りたいと共に、多くに知られたい。彼人を知ると同時に彼人に知られたい。是れ自然の要求である。この要求の容れられない時の苦痛さ。人はこれによつて云ふべからざる、淋しさに襲はれ、果ては自暴自棄にも傾かんとするのである。こゝに我が身の上心の内を悉く知り盡して、同情の言をかけて呉れる人があつたら、幾程嬉しい事であらうか。此場合には友人よりも兄弟、兄弟よりも親である。親はよく子供の實情に精通して、都合よく計うてくれる。實に子を見ること親に如かずとは、眞理なる哉。けれども親も矢張凡夫である。止み難い衷心の生死問題までは、解決してくれぬ。如來は畢竟依である。畢竟の所依所は如來である。而も如來と我等との間は至つて密接である。兎角上の事は下が知らず、下の事は上が知らず、従つて食ひ違の多いので困る。

ぼうく眉に鐵漿黒々と付けた昔の公家衆は、月卿雲客とよばれて、何事も風雅を事とし、下さまの事を知らぬ例であるが。或る時飯杓子を携へ行き「これは何の役に立つものぢや」と尋ねたが、並居る公家が不思議に思つて評議區々。中に一人が「ハ、ア分つた、これは鬼の耳搔で御座らう」外の公家も一同に手を打つて「成程々々、それに相違はあるまい」辛苦々々の揚句で漸く評議が一決した。それと反對に上様のことは、下々に分らぬもの。丹波の山家から出て、始めて京都の堂上方へ炊婢奉公に住み込んだ女が。或る日主人の君、取り急いで參内の折、庭先へ落して行つた笏を拾つて、折返し／＼熟々見て不審がつて居る。「こんなひしやげた播木で、能く味噌が播れたものだ」。

飯杓子を以て鬼の耳搔としたのも、笏を見てひしやげた挿木と云つたのも共に下を知らず上を知らないからである。如來は最もよく我等衆生の心情に通ぜさせられてある。我等が心の底のありたけは、残る隈なく御承知であらせられる。

世に我を愛する者は少くない。されど我等は、我が上に善を認めて我を愛するのである。然るに我が善は電の如く移り易く、虹の如く消え易い。随つて世の愛は永久に我等に加へられるものでない。如來獨りよく我等の全分をしろしめして、我に欺かれ給はず、又我を買被りたまはず、此上に至高至大の慈恩を加へ給ふのである。「しかるに佛かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけりと知られて、いよくたのもしくおぼゆるなり。『歎異抄』落つる私があったから、落さぬ彌陀があらせられるのである。落さぬ彌陀があらせられるから、落つる私は最早大丈夫。「いかに地獄に落ちんと思ふとも、我はからひにては地獄へも落ちずして極樂へ參るべきなり」。(『御文章』)